

# 花の歌 歳時記

前田康子

晩秋から初冬にかけて、小さい白いふわふわしたものが空中を飛ぶ。埃ほどの大きさである。ちょうど目の高さに飛んできて、風に流されて行く。

両手でそっと捕まえてみると、それは白というより、青白い色をした虫である。お尻に綿のようなものがついていて、それが埃に見えるのだ。このワタムシという虫はアブラムシの仲間で、いろいろ種類があるらしい。よく見かける、リングワタムシは害虫で、リングの苗木をアメリカから輸入したとき、木について渡って来た。

雪虫といったり雪蝨、雪婆といろんな呼びかたがある。この虫がたくさん飛ぶ年は、雪がたくさん降るのだと子供たちが言っていた。現に去年はこの虫をたくさん見た。そして京都市内では珍しく十センチ以上雪が積もった日が、何日かあった。

今年もたくさん雪が降るのだろうか。日暮れの路地を雪虫が飛んでいるのは、何とも言えないさびしい感じがする。



絵・サザンカ／小柳吉次

## 柘

木偏きへんの横に冬と書いて柘。花は小さく目立たないが、冷たい空気の中、どこからかい匂いがすればそれは柘だ。

冬の天そらかすかに蒼く冴ゆる日を土にこまやかに散れる柘ひいらぎ

柏崎驛二かしきえきふた 『四月の鷲』

柘の花が咲く頃、まだ空は冬のどんよりした空ではない。気温は低くても、空は澄んだ色をしている。明け方、外に出て空気を吸うと気持ちがいい。そんな日は特に、柘の花の香が立つ。

同じような形の葉で、クリスマスのかざりにする、赤い実のつくホーリーは、柘とは別種のものらしい。

疼ひららぎて棟木むねぎの裂くる冬の夜のきびしさ  
にしも堪へむとするも

岡部文夫 『雪天』

ひいらぎ  
柘

柘は疼木とも書く。葉を触ると疼痛とうつうを起こすところから来ているという。柘の歌を探していると、厳しい冬の歌に出会った。

もうこんな時間かというように死は、陽あたる道のひいらぎの花

吉川宏志よしかわひろし 『塔』 平成十一年一月号

若い歌人の歌である。柘の木はよく垣根などに使われて、あちこちの人家で見かける。路地を曲がって、急に柘の花に出会うように、おもいがけなく死が訪れることもある。





## 茶

産院に通っていた頃、下鴨しもがものこんもりとした森が近くにあった。秋も終わりになり、花が少なくなってきた頃、茶の花が咲いている一角があった。ふさふさとした蕊しべがやわらかで、ゆったりとした気持ちにさせてくれる花である。

### ちや 茶

新らしく障子張りつつ茶の花もやがて咲  
かなとふと思ひたり

北原白秋「雀の卵」

新しい障子の白さを見ながら、茶の花がも  
うそろそろ咲くことを思い出している。咲け  
ば切つて、床の間に活けるのかもしれない。

茶の花を摘めばちひさき黒蟻の蕊しべにひそ  
めり、しみしみ見て棄つ

若山牧水「死か芸術か」

茶の花の蕊は大きいので、目立つ。それゆ  
えに冬を生き延びる虫達が寄ってくるのだら  
う。細かい観察がいき届いた歌。

茶の花のこぼれて白き道をきぬかたへの  
藪は去來の藪なり

尾山篤二郎「草籟」

この歌には「二尊院の道にて。」という詞書  
がある。去來の藪とは、その向かいの落柿舎  
に隠棲した、向井去來の庭のことであろう。  
嵯峨野の冬の光景が目に見えてくる。

緑茶用に栽培されている茶の木は刈られて  
背が低いが、自然にほうっておくと七〜八メ  
ートルになるものもあるという。

葉がくれに茶の木は花のともるごと土ひ  
くく咲くこの道のほとり

上田三四二「湧井」

寒さとともに、花も虫も少なくなってきた。  
命の灯かりのように、茶の花が咲いているの  
を、作者の眼は喜んでいる。

(まえだ・やすこ「塔」会員)